長崎大学医療技術短期大学部理学療法学科における学生異動の実態

—— 開設以来10年間の退学・休学・留年を中心に ——

田原　弘幸[1]・井口　　茂[1]・鶴崎　俊哉[1]・沖田　　実[1]・中野　裕之[1]
千住　秀明[1]・穐山富太郎[1]・加藤　克知[1]・松坂　誠應[1]

要　旨　学生異動の実態を把握することは，これからの教育を展開していく上で有意義であるとの考えから，長崎大学医療技術短期大学部理学療法学科開設以来10年間の学生身分異動について検討した．

対象は10年間の入学生1023名である．理学療法学科（以下，当学科）に入学した203名については資料・学科会議の内容をもとに退学・休学・留年について，また作業療法学科200名，看護学科620名については資料の関係で退学についてのみ検討した．合わせて，いくつかの他大学短大部の報告との比較も行った．

本短期大学部全体の退学率は2.6％で，当学科は3.9％であった．当学科における留年者の主な理由は学業不振と出席日数不足で，休学者および退学者の主な理由は進路選択の不適切であった．

長崎大医療技短大紀 9: 15-21, 1995

Key words　：退学，休学，留年，進路変更

1．はじめに

1985年，長崎大学医療技術短期大学部（以下，本学部）に理学療法学科（以下，当学科）が開設されて10年を経た．この間，新カリキュラムへの移行など，学生を取り巻く環境にも大きな変化がみられた．その中で学生活動を通じての身分の異動がどのように変遷したかは気になるところである．学生の異動実態についてはいくらかの報告[1,2]もあるが，当学科の状況等についての検討はこれまでになされていない．長崎大学では1989年より教育研究水準の向上と活性化に努め，その社会的責務を果たしていくためには，自己点検・評価を行い，改善への努力を重ねていくことが必要との考えから，自己点検・評価のあり方および具体的方策に至るまで，約3年間の慎重な検討を経て自己評価報告書[3]を刊行した．当学科でもこの自己評価に参画し，教育評価，研究評価，社会的活動評価および機関（組織）評価を行ってきたが，その中で学生の異動については触れなかった．1994年には10期生が入学し2年次に進んだ段階であるが，これを機会にこれまでの教育活動を振り返り，今後のあり方を探るために，開設以来10年間に入学した学生の身分異動の実態を検討したので報告する．

2．対象と方法

対象は，1985年度から1994年度までに本学部に入学した学生1023名である．修業年限1年の専攻科学生は除いた．この中から当学科に入学した学生203名を対象に，1995年3月までの学務係への届け・学科会議の内容を資料として退学・休学・留年について検討した．また，作業療法学科（以下，作業）学生200名，看護学科（以下，看護）学生620名については検討資料の都合で退学についてのみ検討した．

検討項目は上野らによる北海道大学医療技術短期大学部（以下，北大医技短部）の報告[1]を参考に，学科別・男女別・入学年度別・当該異動学年別とした．

3．結　　果

(1)　本学部の退学者動向（表1，2）

本学部3学科の1985年度から1994年度までの全入学者の退学率は2.6％で，学科別では作業4.0％，当学科3.9％，看護1.8％の順であった（なお看護の開設は1984年度である）．

男女別では本学部全体で男子4.5％，女子2.3％と，男子は女子より約2倍高かった．当学科男子（5.5％）は作業（4.0％）に比べやや高い率を示した．一方，女子では作業4.0％，当学科3.1％，看護1.8％で，看護が低率であった．入学年度では開設5年で区切ると（新カリキュラム移行の時期と合致する），本学部全体で前半74％，後半26％で前半に多く，作業では前・後半同数であったが，看護（82％）と当学科（87.5％）は前半で顕著に多かった．

学年別にみると，本学部全体では1年次44.4％，2年次33.3％，3年次22.2％と学年が進むにつれて減少の傾向を示した．しかし，看護では各学年でほぼ同数であった．退学率についても同様の傾向であった．

1　長崎大学医療技術短期大学部理学療法学科

表１．退学者の学科別・入学年度別・男女別動向（1985～1994年度）

学科名	性別	入学年度												合計	入学者	退学率
		85	86	87	88	89	小計(%)	90	91	92	93	94	小計(%)	(名)	総数	(%)
看護	男	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	8	0
	女	1	1	1	3	3	9	1	0	0	0	1	2	11	612	1.8
	計	1	1	1	3	3	9 (82)	1	0	0	0	1	2 (18)	11	620	1.8
理学療法	男	1	0	1	0	1	3	1	0	0	0	0	1	4	73	5.5
	女	1	0	2	0	1	4	0	0	0	0	0	0	4	130	3.1
	計	2	0	3	0	2	7(87.5)	1	0	0	0	0	1(12.5)	8	203	3.9
作業療法	男	0	0	1	0	2	3	0	0	0	0	0	0	3	75	4.0
	女	1	0	0	0	0	1	0	3	1	0	0	4	5	125	4.0
	計	1	0	1	0	2	4 (50)	0	3	1	0	0	4 (50)	8	200	4.0
合計	男	1	0	2	0	3	6	1	0	0	0	0	1	7	156	4.5
	女	3	1	3	3	4	14	1	3	1	0	1	6	20	867	2.3
	計	4	1	5	3	7	20 (74)	2	3	1	0	1	7 (26)	27	1023	2.6

＊　看護学科は1984年度開設

＊＊　看護学科の1985－1990年度においては男子学生の入学はなかった

＊＊＊ 入学者総数には死亡等による除籍者（３名）も含む

表２．退学者の学科別・男女別・学年別数・学年別退学率

学科名	性別	退学年次			全体
		1	2	3	(名)
看護	男	0	0	0	0
	女	4	3	4	11
	計　(%)	4(36.4)	3(27.3)	4(36.4)	11(100)
	退学率(%)	0.6	0.5	0.6	1.7
理学療法	男	2	2	0	4
	女	2	1	1	4
	計　(%)	4(50.0)	3(37.5)	1(12.5)	8(100)
	退学率(%)	2.0	1.5	0.5	3.9
作業療法	男	1	2	0	3
	女	3	1	1	5
	計　(%)	4(50.0)	3(37.5)	1(12.5)	8(100)
	退学率(%)	2.0	1.5	0.5	4.0
合計	男	3	4	0	7
	女	9	5	6	20
	計　(%)	12(44.4)	9(33.3)	6(22.2)	27(100)
	退学率(%)	1.2	1.0	0.6	2.6

＊　退学率：入学及び進級時の各学年実数に対する各学年退学者数の百分率

(2)　当学科における学生異動の状況

１）学生の全体像（表３，４）

10年間の入学者総数は203名で，男女比率は各年度によってバラツキがみられ，男子73名（36.0%），女子130名（64.0%）であった．また，出身高校別でみると，県内出身者115名（56.6%），県外出身者88名（43.4%）であった．

10年間の留年，休学，退学などの延べ異動数は44名で，開設５年で区切ると前半32名（73%），後半12名（27%）であった．

２）留年者の動向（表４，５）

留年者実数は14名であった．内，留年２回以上は２名で，延べ人数は17名であった．男女別では男子７名，女子７名で，男女別入学者に対する割合は男子9.6%，女子5.4%で男子が女子の1.8倍であった．学年別では全数２年次で，留年延べ数を開設５年で区切って前後各５年間での比較では前半がやや多かった．

留年の理由は「学業不振」ないし「出席日数不足」であった．前者は単位未修得によるもので，勉学への認識の甘さによるものだったが，就学への意欲はあった．後者はそれぞれの理由で出席日数が不足したものであった．留年から退学の転機に至ったものは２名（14%）で

表３．理学療法学科入学者の年度別・男女別・出身別動向（1985年～1994年度）

入学者総数：203名

性別	入学年度										合計	全入学者に占める割合(%)
	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94		
男	10	8	4	7	6	11	12	4	5	6	73	36.0
女	10	12	16	13	14	11	8	16	15	15	130	64.0
県外出身者（男女計）	8	5	7	10	10	11	7	10	9	11	88	43.4

＊　94年度は私費外国人留学生１名を含む

表４．理学療法学科の異動学生の年次別・学年別推移

異動内容	学年	入学年度												合計（名）	割合（%）
		85	86	87	88	89	小計(%)	90	91	92	93	94	小計(%)		
退学	1	1	0	2	0	0	3	1	0	0	0	0	1	4	50.0
	2	1	0	1	0	1	3	0	0	0	0	-	0	3	37.5
	3	0	0	0	0	1	1	0	0	0	-	-	0	1	12.5
	小計	2	0	3	0	2	7 (87)	1	0	0	0	0	1 (13)	8	100
休学	1	2	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2	4	21.1
	2	5	1	2	0	3	11	0	0	2	0	-	2	13	68.4
	3	0	1	0	0	1	2	0	0	0	-	-	0	2	10.5
	小計	7	2	2	0	4	15 (79)	2	0	2	0	0	4 (21)	19	100
留年	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	1	5	2	0	2	10	0	5	2	0	-	7	17	100
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0	
	小計	1	5	2	0	3	10 (59)	0	5	2	0	0	7 (41)	17	100
合計	1	3	0	2	0	0	5	3	0	0	0	0	3	8	18.2
	2	7	6	5	0	6	25	0	5	4	0	0	9	33	75.0
	3	0	1	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	3	6.8
	小計	10	7	7	0	8	32 (73)	3	5	4	0	0	12 (27)	44	100

＊　休学及び留年は延べ人数を示す

表５．理学療法学科における留年学生の動向

学生No.	性別	留年の学年	留年の直接理由	転機	備考
1	男	2，2	学業不振・出席日数不足	退学	実習中の精神的不調大
2	女	2	学業不振	卒業	
3	女	2	学業不振	卒業	
4	女	2	学業不振	卒業	
5	男	2	出席日数不足	卒業	家族間問題が背景
6	男	2	学業不振	卒業	
7	男	2	学業不振	卒業	
8	女	2	出席日数不足	退学	腰痛による実習遂行不可
9	男	2	学業不振	卒業	
10	男	2，2，2	出席日数不足	在学中	就学意欲に欠ける
11	女	2	学業不振	卒業	
12	男	2	学業不振	卒業	
13	女	2	学業不振	在学中	
14	女	2	学業不振	在学中	

表6．理学療法学科における休学学生の動向

学生No.	性別	休学学年	休学期間(月数)	休学届の事由	休学に至る背景	転 機	備　考
1	女	1	6，6	自律神経失調	一度も出校なく不明	退学	
2	男	2	7，6，6，5，6	病気療養	実習中の精神的不調	退学	留年No.1
3	男	2	6	経済的理由	前期の単位未修	卒業	留年No.6
4	女	3	6	家庭の事情	就学の意志有	卒業	
5	女	2	6，6	進路再検討	実際は再受験の準備	退学	
6	男	2	11	進路再検討	進路模索	退学	
7	女	2，3	3，6，10	病気療養	腰痛と自信喪失	退学	留年No.8
8	男	1	10，12	進路再検討	進路模索	退学	
9	女	2	6	一身上の都合	後期の単位未修	在学中	留年No.13
10	女	2	6	一身上の都合	後期の単位未修	在学中	留年No.14

表7．理学療法学科における退学学生の動向

学生No.	性別	退学学年	在籍期間	退　学事　由	退学に至る背景	備　　考
1	女	1	1年	一身上の都合	入学時に休学届（真意不明）	休学No.1
2	男	2	6年	病気療養	精神的不調から実習遂行不可能	留年No.1，休学No.2
3	女	2	3年	進路変更	進路変更(他学部受験を目標)	休学No.5
4	女	1	1ヶ月	他大学入学	他大学へ入学	
5	男	1	5ヶ月	進路変更	長期無届欠席後に届出	
6	男	2	2年	進路変更	進路変更（専門学校受験を目標）	休学No.6
7	女	3	4年	病気療養	病気(腰痛)のため実習遂行不可能	留年No.8，休学No.7
8	男	1	2年	就職	進路変更	休学No.8

あった．

3）休学者の動向（表4，6）

休学者実数は10名であった．内，休学2回以上は5名で，延べ人数は19名であった．男女別では男子4名，女子6名で，男女別入学者に対する割合はそれぞれ5.5%，4.6%で，男子が女子よりやや高かった．学年別では1年次4名，2年次13名，3年次2名で2年次で多かった．休学延べ数を開設5年で区切って前後各5年間で比べると，前半15名（79%），後半4名（21%）で，前半で顕著に多かった．休学期間は3～12ヶ月で多くは6ヶ月以内であった．

休学事由は「進路再検討」3名，「病気療養」2名，「一身上の都合」2名などであった．No.1，No.8は入学手続きはしたが殆ど出校がなく，No.1は全く連絡がとれなく不明である．「進路再検討」のNo.5，No.6，No.8は受験時の進路決定における認識の乏しさによるものであった．「病気療養」のNo.2は学業不振を背景にした実習中の精神的不調から5回の休学を繰り返しながら再起を図ったが，最終的に退学の転機に至った．また，No.7は実習中の腰痛発症から，思うような改善が得られず自信喪失に陥り退学の転機に至った．No.3，No.9，No.10は単位未修から次年度再履修のため，前或いは後期に休学したものである．No.4は家庭の事情が明白で学業上の問題はなかった．

転機では，卒業2名，在学中2名，退学6名であった．退学は休学者の6割で，これらは進路と慢性的疾患の経過不良を悩んでのものであった．

4）退学者の動向（表4，7）

退学は8名で，全入学者の3.9%であった．男女別では男子4名，女子4名で，男女別入学者に対する割合はそれぞれ5.5%，3.1%で，男子が女子より高率であった．学年別では1年次4名，2年次3名，3年次1名で学年の進行とともに減少の傾向にある．退学者数を開設5年で区切って前後各5年間で比べると，前半7名（87%），後半1名（13%）で，前半で顕著に多かった．在籍期間は1ヶ月から6年までで，退学に至る理由によりさまざまであるが，慢性疾患などのため療養を経ながら再起を図った者では長かった．

退学事由は「進路変更」，「就職」，「他大学入学」など進路選択上の理由をもつ者が5名（62.5%），精神的不調・腰痛による「病気療養」2名（25%），入学手続きはしたが殆ど出校なく真意不明な「一身上の都合」1名（12.5%）であった．

4．考　　察

本学部での退学者に関する今回の調査で，1985年度から1994年度まで10年間の入学者の退学率は2.6%で，男子学生が女子学生の2倍近くであったこと，学科別では看護（1.8%）が他学科に比して少なかったこと，開設5年で区切って前後各5年間の時期でみると当学科と看

護は前半に顕著に多かったこと，退学学年別にみると本学部全体では１年次44.4%，２年次33.3%，３年次22.2%と学年が進むにつれて減少の傾向を示したが，看護は各学年でほぼ同数であることが明らかとなった．

本研究のモデルとした上野ら[1]による北大医技短部作業療法学科の報告によると，看護，理学，作業の他に衛生検査技術，診療放射線技術を含めた５学科での開設以来10年間（1981年度から1990年度まで）の入学者の退学率は5.2%で，男女別では男子が女子の1.5倍高かった．開設５年で区切っての前後半の時期での比較では前半が多いが，各学科の特定の傾向は認められなかった．また，学科別では最高が作業の10%で，最低は理学の2.5%であった．そして，退学学年別にみると学部全体では１年次53.7%，２年次26.3%，３年次20%であったとある．また，弘前大学医療技術短期大学部（以下，弘大医技短部）の報告[2]をみると，看護，理学，作業，衛生技術，診療放射線技術の５学科での５年間（1988年度から1992年度まで）の 入学者の退学率は3.0%であった．学科別では最低が作業（1.0%）で，看護（1.5%），理学（5.0%）であった．

単純に各医技短の状況を総括することは短絡的すぎるが，敢えてこれらを整理すると退学率は３%前後から５%前後で，男子学生の退学率は女子学生より高率で，学科別では特定の傾向は認められなく，退学学年別では１年次で高く学年進行とともに低くなる傾向にあることなどがいえそうである．

上野ら[1]は北大医技短部作業療法学科で退学率が高率である理由として，看護や理学は医療職としての歴史が古く，また社会的にも広く認知されているので総じて退学率が低いが，作業ではその点が不十分であることを指摘している．しかし，今回の本学部での調査および弘大医技短部の報告では理学の退学率が高率であり，認知度の地域差なども検討する必要がありそうである．

今回の調査では他学科の退学理由ににについては検討しなかったが，学務係への届けの範囲で分析すると，本学部全体での退学者27名の退学理由は進路変更17名，就職４名，病気２名，結婚１名，一身上の都合１名で進路選択の不適切を理由とする者が21名（78%）であった．学年別では１年次11名，２年次７名，３年次３名で，一年次の11名については単純な進路変更と考えることもでき，このことは受験の段階で医療技術職についての理解が不十分のまま受験し，入学してくる者が少なくないことを反映したものであろう．受験雑誌，学校，知人，マスメディアなどさまざまな情報源を介して，医療技術職に対する情報は以前よりも入手しやすくなっていることからすると，これらの情報が表面的域に止まり理解を深めるまでに至っていないことが考えられ，本学部で実施している受験生を対象にした学校案内の在り方についても検討の余地があるのかもしれない．しかし，２・３年次の10名については専門科目や臨床実習などを通して自己の適性，実習施設も含めた教育環境への不適応，問題解決能力の低さなどの問題が背景に考えられる．この点では，近年，医療技術職の養成が大学教育の形態で行われる方向で進展しいることは解決策の一つとして喜ばしい現状といえる．いずれにしてもこれらの問題は解決していかねばならない課題である．

一方，当学科における学生異動では留年，休学，退学を合わせると実数32名，当学科入学者総数203名に対する割合は15.8%で，弘大医技短部の理学における５年間（1988年度から1992年度まで）での22名，入学者総数100名に対する割合22%より低率であった．これらのデータが全国的にどのような位置にあるかは確認できていないが，いずれにしても決して少ない割合とは思えない．

留年者は14名（延べ17名），入学者比6.8%（8.4%）で，弘大医技短部理学の13名（13%）の５割弱程度であった．当学科の留年者で退学の転機に至ったものは２名であった．この２名は病気が原因で休学から退学の措置をとっており，留年のみの措置をとった学生は卒業および在学中である．留年の理由が学業不振，出席日数不足であることを考えると，当学科における学生指導がプラスに関与しているともいえる．

休学者は10名（延べ19名），入学者比4.9%（9.4%）で，弘大医技短部理学の４名（４%）より若干高率であった．当学科の休学者で退学の転機に至ったものは６名，卒業２名，在学中２名であった．休学の理由は進路再検討，病気，一身上，家庭の事情などである．進路変更の３名は休学期間を次の進路のための準備に当てていた．

退学者は８名，入学者比3.9%で，弘大医技短部理学の５名（５%）より若干低率であった．しかし，北大医技短部理学の2.5%よりは高率であった．退学の理由では進路変更（５名），病気（２名），不明（１名）であった．

当学科異動学生の入学年度を1990年の新カリキュラム移行を境に，前半５年と後半５年に分けてみると，留年者は59%，41%で，10年間を通して特定の傾向は認められなかった．しかし，休学者は79%，21%で，退学者は87%，13%であり，新カリキュラム移行後明らかに減少している．このことについては，90年以降，進路選択の不適切を理由にしたものが１名（延べ２名）であることからして適切な選択がなされるようになってきたこと，新カリキュラムが学生としての活動上プラスに関与した結果であること，当学科の教育上の対応の変化によるものなどが考えられる．現時点では何が主因でこのような傾向にあるか言及できない．

進路変更に関しては，上野ら[1]が指摘する「看護や理学は医療職としての歴史が古く，また社会的にも広く認知されているので総じて退学率が低い」という現象が進んでいるともみれるが，他校に比して当学科が高率であることは否定できない問題で，認知の度合いを高めるための方策が必要であろう．また，休学者の理由をみると

き，一身上（休学No.9，10），経済的理由（休学No.3）では単位未修が背景にあり，授業時間割上の問題で半期間受講科目がないこと，その期間の学費負担の問題が絡み，学科とも相談の上での休学でありフォローが可能であった．しかし，進路選択の不適切が理由の場合，学生自身が悶々と思考し，進路変更の方針が出てから学科で検討するというのが現状であり，問題の進行の中で解決を探ることができていないことが課題として残る．

病気のため留年・休学を経て，退学の転機に至った2名（退学No.2，7）の場合，問題発生の当初はこのような展開になろうとは想像もしなかったケースである．学科としては何度も当人たちと話し合い対応してきたにもかかわらずの結果である．当初の問題発生の背景は学業不振，臨床実習のつまづきという，多くの学生が程度の差こそあれ遭遇するようなことであり，このようなケースでは適性，心理傾向，問題解決能力などの要因も関与し，初動対応の難しさが感じられた．

今回の調査で知り得た結果は今後の教育活動に反映されるものと確信している．

文　献

1．上野武治，深澤孝克，真木誠，大宮司信，末永義圓，丸谷隆明，村田和香，河野仁志，吉田直樹，八田達夫：北海道大学医療技術短期大学部作業療法学科における学生異動の実態－開設以来10年間の入学者の留年・休学・退学を中心に－，北海道大学医療技術短期大学部紀要，7:61-71，1994.

2．弘前大学医療技術短期大学部編：弘前大学医療技術短期大学部自己点検・評価報告書現状と課題－教育・研究・社会的活動・学術図書等－1988～1922，弘前大学医療技術短期大学部，青森，1994，pp5-6.

3．長崎大学自己評価総括委員会編：平成4年度長崎大学自己評価報告書「大学教育の改善に向けて」－長崎大学の現状と課題－，長崎大学，長崎，1993.

Factors influencing of the Leavers, Absentees and Repeaters in the Physical Therapy Undergraduates Course for the First 10 Years

— A Case of the School of Allied Medical Sciences, Nagasaki University —

Hiroyuki TAHARA[1], Shigeru INOKUCHI[1], Toshiya TSURUSAKI[1],
Minoru OKITA[1], Hiroyuki NAKANO[1], Hideaki SENJU[1], Tomitaro AKIYAMA[1],
Katsutomo KATO[1] and Nobuou MATSUSAKA[1]

1 Department of Physical Therapy, The School of Allied Medical Sciences, Nagasaki University

Abstract The authors surveyed and discussed the factors influencing of leavers, long-term absentees, and repeaters among physical therapy students (PTS) for 10 years since the establishment in the School of Allied Medical Sciences, Nagasaki University, compared with that of the nursing and the occupational therapy students in the same school, and that of PTS in two other schools.

The percentage of leavers in the department of physical therapy was 3.9%, while the mean value for the three departments was 2.6%. Repeating was mainly attributed to poor grades and insufficient attendance; temporary absence and withdrawal from school may to the wrong career choice. Comparison with the cases of other schools was hindered by a number of factors including regional differences. We believe that the present survey is very valuable for the improvement of physical therapy education in the future.

Bull. Sch. Allied Med. Sci., Nagasaki Univ. 9: 15-21, 1995